

この作品集は、中国の作家・教育家である葉聖陶が一九二一〜一九三六年に発表した作品を収録したものである。葉聖陶は中国における現代童話の創始者といえる人物で、現在に至るまでその作品が読み継がれています。

葉聖陶は本名を葉紹鈞といい、一八九四年に中国の江蘇省蘇州市の平民家庭に生まれました。厳しい生活のなかでも、教育に力を入れる家庭であったようです。一九一一年に中学を卒業した後、杭州・上海・北京などで十年ほど小学校教員を務め、その後、書店や出版社などに勤務しながら本格的な執筆活動を開始しました。初めての小説を発表したのは一九一八年で、一九二一年には周作人、沈雁氷（茅盾）、鄭振鐸らと共に、中国近代文学の確立に大きな役割を果たすこととなる文学研究会を創設し、『小説月報』『婦女雜誌』『中学生』などの刊行物の編集に携わりました。童話を書き始めたのは、一九二一年に発表した「小さな白い船」からで、週刊誌『児童世界』に三十篇余りの童話作品を次々と発表しました。一九二八年に彼の唯一の長編作品で、五四運動期の小市民を描いた自伝的色彩の濃い『倪煥之』を発表しましたが、一九三〇年代には創作活動の第一線から退き、主に教育・文化事業に力を入れるようになりました。一九四九年に中華人民共和国が成立した後には文化界民主派人士として政治協商会議に出席、人民教育出版社社長、教育部副部長などの職を歴任し、教育界の指導にあたりました。それと同時に、詩歌・エッセイ・童話・教育論文などの執筆活動も盛んに続け、一九八八年に九十四歳でこの世を去りました。

中国における児童文学は、二十世紀初頭の白話運動（易しい口語で文学を表現しようとする運動）のなかで生まれたものです。一九一五年に雑誌『新青年』が創刊されましたが、そこには周作人が翻訳したアンデルセンの童話「マッチ売りの少女」も掲載されました。一九二一年には鄭振鐸によって中国初の純児童文学雑誌『児童世界』が創刊され、そこに掲載された葉聖陶の創作童話をまとめたのが、一九二三年に出版された短編童話集『稻草人（かかし）』です（一九二一年から一九二二年に書かれた二十三篇の作品を収録）。そのため、中国の児童文学の確立に葉聖陶が大きく貢献したと言えることができます。魯迅によって「葉紹鈞氏の『かかし』は中国の童話に独自の創作の道を切り開いた」と評されています。

本書は、この児童文学誕生から二十世紀初めまでの百年間にわたる中国児童文学作家の百冊を集めた「百年百部中国児童文学古典シリーズ」におさめられた一冊を日本語に翻訳したものです。中国の教育現場では、時代の推移とともに葉聖陶の作品があまり顧みられなくなった時期もあったようですが、近年になってこの作品は小学校三・四年生向けの課題図書とされるなど、ふたたび脚光を浴びています。

葉聖陶の作品は、戦時中に『稻草人（かかし）』『古代英雄の石像』などの訳書が日本でも出版されており、一九四三年には中国文学者の竹内好が長編小説『倪煥之』を『小学教師倪煥之』として翻訳しています。戦後

になってからも「かかし」や「古代英雄の石像」などの作品は何度も日本で紹介されていますが、近年では入手も困難になっており、今回、このようにまとまった形で日本に紹介されるのは、画期的なことといえます。

表題作「かかし」は、一九二二年に書かれた作品で、葉聖陶の初期の童話の代表作であり、昼間の美しい田園風景とは打って変わった真夜中の出来事により、世の中に起きている悲劇を描き出したものです。苦勞して育てた稲を虫に食われてしまった老婦人、病氣の子どもを放りだして漁をしなければならない女性、捕まえられて死にゆくコイ、夫に売り払われそうになり自殺しようとしている女性など、日常の悲劇に対し、何の力にもなれず、何も変えることができず、ただ焦って見ていることしかできない「かかし」に、己の絶望を重ねて描いたものです。「かかし」が書かれたのは、中国国内が分裂し、列強が中国の領土を虎視眈々と狙っていた時代です。この時代の中国人の苦しみ、現実を変えたくてもどうすることもできない己の無力さを嘆く気持ちが込められているといえましょう。

子どもにこんな救いのない、絶望的な話を読ませてどうするんだと非難する人もいるでしょう。また、わずか百年前とはいえ、現代とは状況がまったく異なっていて、人力車とか、カイコとか、見たことも聞いたこともないものがたくさん出てくることに戸惑う子どもも多いことでしょう。こういったものをすべて理解するのはかなり大変なことです。それにもかかわらず、過去の遺物として捨て去られることなく、これらの作品は読み継がれ、脚光を浴びています。それは、すでに遠くなった一九二〇年代という時代の苦しみを、これらの作品により現代の子どもたちに教え、彼らの苦しみの上に自分たちの今の恵まれた生活があるということを知っ

てもらいたいという中国人の思いがあるからで、自分たちが通ってきた道を、文学作品を通して語り継いでいく必要を感じているからにほかなりません。

この作品集には、表題作「かかし」のほかに、お金や財産に執着する人間への批判精神に溢れた「旅行家」「大金持ち」、メルヘンチックな描写のなかで貧富の差、社会の不平等を描き出す「フラワーガーデンの外で」、人の心に根差す高慢さを批判する「古代の英雄の石像」、中国的な辛辣さに溢れる「皇帝の新衣装」、中国の伝統的な儒教教育の欠点に対する批判がさりげなく込められた「本たちの夜話」、仕事をするということはどういうことなのかを考えさせられる「カイコとアリ」や「将来何をするか」、行き詰ってしまった真面目な教育者を描く「クマ夫人の幼稚園」など、バリエーションに富んだ三十二の作品が収録されており、すべて葉聖陶の教育者としての思想が込められたもので、童話という範疇を超え、大人が読んでじっくり味わうに値する興味深い作品ばかりです。実際には、時代が異なると同時に文化も異なるため、日本で育った子どもがこれらの作品を理解するのは、中国で育った子どもが理解するよりも、さらにハードルが高いといえます。しかしこれらの作品は、時代の差も地域の差も乗り越えることができる普遍的な魅力を持ち、これからも長く語り継がれていくことでしょう。